

まう、之は太閤より賜はつた切及政宗の脇差であれば、かたみに参らすとて之を吉政に與へました、かくて後田中は石田を引具して大津へ行つた所、家康は本多正純をして石田を守護せしめました。其の時正純石田に向ふて曰く、秀頼公年若くて事の是非をしらしめず事はあるまい、唯だ太平に致す道こそあるべきに、よしなき軍を起して、かゝる耻辱に及ばるゝとは其の意を得ぬと、三成答へて曰く吾れ士民より起れるに國の賜ひたる太閤の恩は譬へんやうもない、世の状を見渡すに、徳川殿を打亡ぼさねば終に豊臣家の爲によからぬことであれば、秀家景勝を始めとし、全心しなかつたのを強めて勧め、遂に此の軍を起した、然るに戦に臨んで二心ある輩が裏切

をしたから、勝つべき軍に負けて仕舞つた、若し二心ある人だになれば、汝達を始め、此の如くからめ取らんに志を失ふて是非もない、運が盡くれば九郎判官も衣川に空しくなられるやうなもので吾が負けしも天命であると、其の時正純又曰く、智將は人情を計り時勢を知るといふに、諸將の全心も待たず、軽々しく軍を起し、而も軍敗れて自害もせず、からめ取らるゝといふは如何にぞやと、之を聽ける三成怒て曰く、汝は武略は露も知らぬと見える、腹を切て人手にかゝらじとするは素武者の事である、見よ頼朝公は土肥の杉山にて朽木の洞に身を潜められたではないか、其の心はよも其方には分るまい、若し大庭に搦め取られたら、汝に嘲らるゝ事であらう

まう、之は太閤より賜はつた切刃政宗の脇差であれば、かたみに参らすとて之を吉政に與へました、かくて後田中は石田を引具して大津へ行つた所、家康は本多正純をして石田を守護せしめました。其の時正純石田に向ふて曰く、秀頼公年若くて事の是非をしらしめず事はあるまい、唯だ太平に致す道こそあるべきに、よしなき軍を起して、かゝる耻辱に及ばるゝとは其の意を得ぬと、三成答へて曰く吾れ土民より起れるに國の賜ひたる太閤の恩は譬へんやうもない、世の状を見渡すに、徳川殿を打亡ぼさねば終に豊臣家の爲によからぬことであれば、秀家景勝を始めとし、全心しなかつたのを強めて勧め、遂に此の軍を起した、然るに戦に臨んで二心ある輩が裏切

をしたから、勝つべき軍に負けて仕舞つた、若し二心ある人だになければ、汝達を始め、此の如くからめ取らんに志を失ふて是非もない、運が盡くれば九郎判官も衣川に空しくなられるやうなもので吾が負けしも天命であると、其の時正純又曰く、智將は人情を計り時勢を知るといふに、諸將の全心も待たず、軽々しく軍を起し、而も軍敗れて自害もせず、からめ取らるゝといふは如何にぞやと、之を聴ける三成怒て曰く、汝は武略は露も知らぬと見える、腹を切て人手にかゝらじとするは素武者の事である、見よ頼朝公は土肥の杉山にて朽木の洞に身を潜められたではないか、其の心はよも其方には分るまい、若し大庭に搦め取られたら、汝に嘲らるゝ事であらう

名將百話  
百八十二  
が、大將の道などは語ることも汝の耳には入るまい、今は是までとて後には物をも言はなかつたといふ事であります。

(八十三) 石田三成と島左近

石田治部少輔三成は近江國石村の百姓五右衛門といふ者の子で、幼き時佐吉といひました、其の家貧しき所より近隣の寺に小僧をして居りましたが、或時豊臣秀吉其の寺へ行き、圖らず佐吉の明敏なるを見て之を呼出し、己が側に仕へしめて頻りに祿を増し、終に水口四萬石を與へた、所が其の後秀吉は三成に向ひ、汝は家來を數多招き集めたであらうと問はれた所、イヤ島左近と申す者を一人呼出したばかりでありますと答へた、之を聞いた秀吉は、其の左近といふ

は世に聞ゆる者である、汝が許に小祿でどうして奉公したかと問ふた所が、三成は答へて、私の祿の半分を分かち、二萬石を與へて居りますと答へた、そこで秀吉驚き、君臣の祿が全じといふ事は昔より聞いたことがない、それは如何様汝ならでは出来ぬことであると、早速島を呼出し、手づから羽織を與へ、これよりよく三成と心を合せて働けよと諭した、其の後三成が佐和山を賜はつた時に、三成は左近に祿を増さうかといつた所が、左近曰く、祿は更に不足でありませぬ、それは他の人々に分ち與へて欲しいとて辭りました、此の左近の父といふは、もと室町將軍家に仕へた者で後ち江州高宮の傍に隠れて居つたのを三成が招き出したのであつたともいひます。

(八十四) 石田三成と大久保忠常

石田三成、小西行長、安國寺惠瓊の三將は關ヶ原の敗戦後、關東兵に捕へられて大久保相摸守忠隣の邸に繋がれて居つたのであります。或日三成高手小手に縛められ心中悶へ苦みて打臥せる折しも、粥をもちきたりて、之を召せし侷むる武士がありました、汝は何者ぞと問ひました所が答へて曰く、小子は先年奥州御檢地の際に貴下が關東へ下向ありし砌に拜顔した當家忠隣の息忠常といふ者であります。三成そこで之を眺めて曰く、久しきことなれば、予に於ては聊かも記憶せぬが、さりとは久々の對面にて不覺な事よと思ひ玉ふな、此の我が分際では粥すら食ふことが出來ぬと、そこで忠常曰く、さ

らば繩を解かん程に食事をしたまふやと、三成曰く、左様取計らるれば噉らんと、忠常そこで縛を解き鹽をも與へた所、三成大に喜びて曰く、芳情永く忘れることはない、禮を述べて粥一椀半を噉つた。その時忠常は曝し付けの法なればとて、僅かに三成の頸に繩を掛け、他の縛を解いて置きました。されば三成は此の時大に喜び、一間隔てたる小西行長を喚び、攝州々々と連呼して曰く、家康は如何にも果報由々しき男である、譜代の子供までが皆よく成長して天晴な者となつて居ると、かくて後三成愈々刑に行はれんとするや、忠常之に語りて曰く、明日は愈々貴下の最期となりました、行水を使はれるがよろしいと、乃ち思ひの儘に湯を浴びさせ、浴び終るや

段々の筋ある小袖に紅の裏を付け白小袖も廣小袖に拵へたのを三成に與へて曰く、三成ともいはれし人が洛中を引廻さるゝに見苦くては叶はぬことであれば、此れは予の寸志であります、受領して下さいと、新しき衣類を差出したから、さしもの三成も之を見るや感極つて涙を流し、此の御芳志は生々代々決して忘るゝことはありませぬと、大に禮を述べて翌日遂に潔よく刑場の露と消へたとの事があります。三成の覺悟も忠常の慈悲も實に見上げたる事でもあります。

(八十五)

大谷吉隆と平塚爲廣

大谷刑部少輔吉隆は智謀勝れたる大將であつたが、元來石田三成に吹舉せられた人であれば三成が事を關ヶ原に擧げるとき、大に其の

不可を争ふた、けれども既に遅かりし事とて、死を此の一戦に致すことを覺悟し、之を其の臣平塚爲廣に語りました所、平塚も之を不可としたけれども今更致し方がない、そこで愈々關ヶ原の對陣となつた時吉隆は越前敦賀城より打て出で味方の裏切をした所の小早川秀詮の陣へ向ひ、僅かに六百人を一手とし、鎗衾を作て切て掛りました。其の日吉隆は目を病んで居つたから、士卒は皆之を平塚に下知させ、己れは練絹の小袖の上に村蝶を墨にて書きたる鎧直垂を着し、四方取離したる竹輿に乗つて居つた、そこで大谷の手下なる木下山城守、大谷大學、戸田武藏守重政、平塚因幡守爲廣、今日を最後と決心し、面もふらず切て入つたから、秀詮の先陣立つ足もなく

て直に敗北しました、然し藤堂高虎を始めとし、東國の軍勢抑蒐け  
 來つたから、秀詮の先陣も漸く盛り返して討てかゝつたのを、平塚  
 等は其の死に物狂ひの鋒尖に又も之を追立て、仕舞ふた、其の時爲  
 廣は敵の首數多打とり、一方の大將らしき者の首を吉隆に送り、此  
 の首を自ら討取りましたから、冥途の土産に差上げませう、日頃の  
 約束只今討死しますから、君にも自害して人手でかゝらぬやう遊ば  
 せとて、外に一首の歌をよみて遣した。

名のためにすつる命は惜からじ

つひにとまらぬ浮世とおもへば

此の使に接して、吉隆大に感歎し、自分も追付自害して再會すべし

とて甥の祐玄といふ僧に返事を認めさせ、之を使に渡しました、其  
 の時の歌は

契りあらば六つのちまたにしばしまて

おくれ先だつ事はありとも

といふのでありました、かくて平塚は奮闘して死し、吉隆もやがて  
 自害しました、其の年四十二歳であつたといひます。

(八十六) 直江兼繼と伊達政宗

越後の士大將なる直江山城守兼續は木曾義仲の臣樋口次郎兼光の  
 末孫であります、上杉謙信に仕へて軍功を顯はし、其の子景勝の  
 代にも歴仕したのであります、されば景勝が奥州にて百萬石を賜は

りし時には、兼續は米澤の三十萬石を與へられ、陪臣中では當時第一の大祿でありました。此の人長高く容儀骨格並びなく、辨舌も爽かにして特に大膽でありました、又文藝にも長じて名句もあり文選をも板行しました。或日伏見の城にて、諸大名幾人も居並べる中に伊達政宗が出で、懷中より金錢を取出し人々に見せました所、其の頃金錢の始まつた頃とて、之を珍らしき物に思ひ、持



離しました、そこで政宗は末座にありし直江を呼び、之を見られよ

と差出した時、直江は之を扇の上に受取り、ピョイ〜とて女子の羽根をつく如くに打返しながら眺めました、そこで政宗は言葉をかけ「苦うない手に取られよ」といつた、所が言葉終らぬに、直江曰く「謙信の時より先陣の下知をして、塵を取つた手にかゝる賤しき物を取れば汚れます故に、かく扇に載せたのであります」と、言ひながら、政宗の方へ投げ戻しました、其の廉潔にして剛氣なるには、さしもの政宗も感じ畏れたといひます。此の兼續の父も山城守といひ、もと僧徒で有たのが還俗して武勇を事としたと云ます。

壁書

伊達政宗

仁に過ぐれば弱くなる  
 義に過ぐれば固くなる  
 禮に過ぐれば諂となる  
 智に過ぐれば嘘をつく  
 信に過ぐれば損をする  
 氣長く心穩かにして萬に儉約を用ひて金を備ふべし、儉約の仕方は不自由なるを忍ぶにあり、此世の客に來たと思へば何の苦もなし朝夕の食事もまからずともほめて食ふべし、元來客の身なれば好嫌は申されまじ、今日の行がより、子孫兄弟に能く挨拶をして、婆の御暇申すがよし。

(八十七) 小早川隆景の智謀

小早川隆景死する時遺訓して其の本家毛利輝元を諫め、毛利家は今や五十餘郡を領して富貴誠に溢れて居る、されば之より後は苟且にも國を貪る心が起らば忽ち滅亡を來たす基であると告げました、然るに關ヶ原の時に、輝元は其の戒を忘れ浮田秀家と共に石田に與して領國を増さんとし、關ヶ原へも出陣しなかつたけれども、それが爲に安藝備後の國を削られ、長門周防二州を賜はることとなつたのであります。これより先き、父元就の病重くなつた時、其の子を集め、兄弟の數ほど箭を取寄せ、多くの箭を一つにして折らんとせば中々に折れぬと示した所、隆景はさん候、争は欲より起り候



へば欲を止めて義を守らば兄弟不和の事はありますまいと言ひました、それを聽いて元就大に悦び、此の隆景の詞に従ふべしと諭したとの事でありませう。後又豊臣秀吉が九州を討平げた時、筑前五十萬石を小早川に與へんとしました所、隆景は之を辭退し、之は吾には過ぎた事でありませう。それよりも父祖より傳へたる土地を此上治めたる御座いますといつて、遂に受けなかつたのでありますが、之は隆景の意では、昔し久しく敵であつた吾身にかゝる大國を與へらるゝといふは、眞實吾を愛しての事ではない、九州を馴づけん爲の謀のみに吾を用ひらるゝのである、之は辭退するに如かずとて、其の子秀詮に國を譲り、自分は備後の三原に引籠つたのであります。こ

れ皆隆景の智謀で、よく其の家を後世に全うした所以で有ります。

譬書

小早川隆景

- 一 おもしろい春雨や、  
花のちらぬほど
- 一 おもしろい儒學や、  
武備のすたらぬほど
- 一 おもしろい武道や、  
文學をわすれぬほど
- 一 おもしろい酒宴や、  
本心を失はぬほど
- 一 おもしろい遊樂や、  
辱をとらぬほど
- 一 おもしろい好色や、  
身をほろぼさぬほど
- 一 おもしろい利慾や、  
理義の道ふさがぬほど

一 おもしろの權勢や、  
一 おもしろの釋教や、

他にはこらぬほど  
世理を忘れぬほど

(八十八)

太田道灌の自若

戰國時代武藏の曠野に城廓を構へ、後遂に江戸城たらしめた太田道灌は文武兩道に達せる武將で特に沈毅自若でありました。一日爐を圍んで火を焚いて居りました所が、折しも灰の中に草に似たる一物がニキツキと生へました、其の時坐に侍べる家臣之を見て驚いて曰く、不思議なることかなと、其の時道灌笑て曰く、何も怪しむ所は毫しもない、若し草が逆さまに生へたならば或は不思議とすべきであるが、かく真直に生へたのは尋常一様の事ではないかと、所が

不思議にもかく言ひ訖らぬに其の草は逆さまに生へました。そこで近



侍の武士色を變じ寄怪の眉を擽めました時に道灌曰く、諸士毫も憂ふる所はない予が逆さまに生へれば珍であると言つたのを聞き、直に逆さまに生へるといふのは是亦珍ではない、又毫も不思議ではないぞと、侍臣之を聞きて其の主人の沈勇に驚き、皆其の心を安んじましたが、かゝる自若に驚いたものか、其の後毫も變事を

見なかつたといふことであります。

(八十九)

太田道灌の歌道

太田道灌持資が或日鷹野へ出で、雨に遭ひ、と或る小屋に入りて蓑を借らんとし、一少女より山ぶきの花一折を差出されて其意を解せず、大に恥ぢて歌道に志したといふは有名な話であります。兎に角道灌は戦國時代に於て文武兩道に達した名將でありました。道灌は字を左衛門大夫持資といひ、鎌倉管領上杉宣政の長臣でありました。或時主人宣政が下總の應南に軍を出しました時、山涯の海邊を通るのに、若しや山上より弩を射られやせんか、又は潮は満ちて居りはせぬかと心配しましたのを、道灌聽いて折柄夜半の事であつたのに、いざ見來らんとて、馬に乗り駆け出し、やがて歸り來

て潮は干て居るといひました。そこで宣政が如何にして之を知つたかと問へるに答へて道灌は左の古歌を以てし

遠くなり近くなるみの濱千鳥

鳴音に潮のみち干をぞ知る

今は千鳥の聲が遠く聲へて居るから、潮の干たのを知つたといひました。又或時の事宣政が師を斑さんとし、之も夜の事であつて、折しも利根川を渡らんとしました、然し暗さは暗し、浅瀬も分らず大に困難しました時に、道灌古歌を引き

そこひなき淵やはさわぐ山川の

浅き瀬にこそあだ波はたて

といふを以てし、波音のあらしき所を渡つたならば淺瀬であるといひ難なく軍を渡したのであります。これ等は當意即妙ともいふべからざるものであります。

(九十) 武田勝頼と横田某

遠州高天神城が將に守を失はんとし、武田の守將等連署して主人勝頼の出援を乞ひ、而して曰く、援軍が來らねば將士は退却の途がありませぬと、然るに其の時、横田某なる者、一人連署に加はりませぬ、而して別に書を勝頼に送りて曰く、屋形の御出馬は無用になさるゝがよろしい、何故ならば、一たび出馬あつて、後は、此の城を固く守らねば、屋形の武名に關はることであります、然し今日の

場合は屋形の出馬を辱うしても、とても城を固く守ることは出来ませぬ、されば城兵を空しく討死せしむとも、屋形の弓矢に惡名を附けることは臣子の情として忍びぬ所であります、されば他人はいざ知らず、横田は一人にても敵を禦ぎ、城を枕とませう、然し屋形にしてそれとも尚ほ御出馬あらば、臣は一人、衆に離れて必ず城を遁れ出ますと、然るに勝頼は此の言に耳を貸さず、直に出で援ひましたから、此に於て横田は終に敵陣を切抜け、其の言の如く獨り甲州へ還つたといふことであります。

(九十一) 瀧川一益の自若

瀧川一益が伊勢に國主となれる年、一日机に憑りて文書を繕いて居



りますと、時しも夏の事として一天俄かに掻き曇り、迅雷と疾風とが一時に來り、忽ち庭前に落雷しました、其の時近臣共は顔の色を變へ、而も主人は如何であるかと蒼皇として其の室へ入りました所が、主人一益は從容自若として机に向ひ、依然文書を閲して居りました、之を見て近臣共深く己れ等の所行を愧ぢ、一言の挨拶もなくしてコソコソと退り出たといふことであります。

(九十二) 瀧川一益の沈勇

瀧川一益は織田信長の武將で、任せられて關東管領となり、上州厩橋に居城したことがありました。關東諸家の人質を取りて之を預つて居りましたが、天正十年其の主織田信長、明智光秀の爲に弑せられ、六月飛脚が來て其の由を報ずるや、此の事忽ち四方へ傳はり小田原の北條氏よりは早くも使者を一益に送りて曰く、早々人質を返し、又其の城をも立退くがよい、さうでなければ一戦して勝負を決するのみであると、之は實に弱り目に乘じたものであります。されど一益は毫も之に屈せず、直に答へて曰く、予は信長の命に由て既に關東の管領たるものである、何ぞ汝の命に従ふものであらうぞと、此に於て北條氏大に怒り、直に大軍を以て押寄せ來り、十九

日兩軍武藏野に戦ふたのでありとす。此の時一益の軍は信長の死を聞いて心懸せる爲め、脆くも敗北し一益は關西へ引揚ぐるより外はないこととなりました。されど剛氣の一益は悠々として厩橋に引返し、自ら己が實名を記して先づ寺院に送り、之を過去帳に記さしめて決死の覺悟を示し、而して後上州の諸將を集め、最期の暇乞なりとて酒宴を張りました、其の時一益は自ら鼓を鳴らし、謠を歌ふて聊かも悪びれず『兵の交り頼みあるかな』と舞ひかなでましたのを傍なる倉賀野淡路守は之に和し『名殘今はと啼く鳥』と唱へて通宵一坐と飲み明かし、席上、太刀、長刀、秘藏の軸物等を一々取出して之を諸將に分ち與へ、かくて後自ら諸家の人質を伴ふて松枝に歸

り之に名殘を惜み、それより津田小平次を伴ひ、小室碓井より其の人質を諸家へ返し、終に長島に上り伊勢に引揚たといふ事でありましたが、如何にも大膽にして沈勇なる振舞といふべきであります。

(九十三) 北條氏規の沈勇

小田原城遂に陥り、北條新九郎氏直、城を開いて秀吉の軍門に降つたから、乃ち氏直をして自筆の書翰を伊豆韭山城に送つて同じく開城せしめんとしました、同城は同苗美濃守氏規の守る所でありました時に氏規は其の書を見るや之に答へて曰く、貴諭正に其の意を諒しました、然し籠城の今日に至るまで、日夜絶えず砲火や矢石を送つた敵將に向ひ、おめく城を渡すことは如何にも武士の本意であり

ませぬ、若し家康公家人にても遣はさるゝならば、輒ち開城を致しませうと、之を聞きたる秀吉は氏規の頑強なる志を壯んとし、如何にも武士の意地さもありなんと、此の由を家康に通じ終に家康の臣内藤三左衛門をして韭山の使者たらしめました、そこで氏規潔く城を開いて去り、高野山に遁れたのでありますが、其の終りを全うせんとの意氣組は實に武士道の精神を發揮したものだといふべきであります。

(九十四) 佐々成政の志

豊臣秀吉の武將佐々陸奥守成政が、越中國の守護であつた頃、富山に在城せる菊池入道が時々伺候して国防上の事を議しましたが、或

日主客宴を開き、酒酣となつた頃、成政は興に乗じて、日頃愛翫



せる酒盃を取出し、之を傾けて後入道に差しました。そこで入道難有く御受けし三度まで満々とつがせて之を呑み盡し、更に成政へ返さうとして、時しも腰に帯びたる脇差波平を取出し、之を捧げて曰く、慮外ながら之を主公に献じたう御座います、そも此の脇差は先年入道が長尾謙信に屬して居りました時分、親しく謙信より授かつた名刀ゆへであります。どうか主公も謙信にあやかり

玉はんことを望みますと、其の時成政之を聴くや色を作し、叱咤して曰く、何と申す謙信如何に武勇なればとて何程の事があらん、然るを之にあやかれとて彼の刀を授く、予自ら之を受けんと、行きなり刀を取て之を擲ちました。その時入道騒がずして曰く、謙信にあやかり玉へといふは必ずしも其の武勇をのみいふのではありません彼は遂に九ヶ國の管領とまでなつて居ります、其の果報のいみじき所に倣ひ玉へと御勸めするばかりであります。然しかく主公の不興を蒙るといふも、これ一に入道老筆せるの故にやあらん、されば思ひ指しありとて酒盃を取て之を側なる小姓に渡しました。所が之を見たる成政漸くにして面色を和げ、莞爾として曰く、實に小姓共

のあやかり物には適當であらう、と口を開いて呵々大笑しましたから、入道を初め家臣一同主公成政の壮志に打驚いたといふこととであります。

(九十五) 武田信蕃の沈勇

武田勝頼の一族に常陸介信蕃といふのがありました、天正三年主人の武田勝頼が織田徳川の軍勢と三州長篠に戦ふて敗北をしました時に、信蕃は遠州二侯城を守つて居りましたが、獨り城を固く守つて敵に降りませぬ、そこで徳川家康遠捲にして城を圍み、五月の末より十一月に及ぶまで殆ど半年餘も城中の交通を絶ち、之を苦めたのであります。されど信蕃は毫も之に屈せず、兵士と共に艱苦を同う



して益々固く守りました。其の時城外の噂にては信蕃の父下野守信守は城中にて病に罹り醫藥の手宛も出来ぬ爲に遂に歿したといふことを傳へましたが、それでも信蕃は依然として城を守つて居りました。所が主人の武田勝頼は家康の威に畏れ先づ二俣城を差出すべしといふことを家康に通じました、けれども同城は常陸介信蕃之を守つて中々に下らぬ爲に、勝頼の申込に接しても家康は容易に之を信じませぬ、そこで勝頼の方より使者を三回までも家康の方へ送り終に勝頼自筆の書を致しましたから、家康は漸く之を信じたのであります。かくて此の由を主人勝頼より信蕃に申開けましたから、信蕃は主命なれば固より否まんやうもなく、十二月中旬に至り、家康

に向ひ二俣城開城の事を申送りしました。そこで全月二十三日家康と信蕃と双方より使者を送つて會見せしめ愈々開城といふことになりましたが、其の時徳川勢よりは榊原小平太夫『後の式部大輔』大久保新十郎『後に相摸守』の兩人人質となり、武田勢よりは信蕃の弟依田善九郎全しく源八郎、兩人質となつて、双方へ行つたのであります。然るに開城の約束日に至り生憎と雨が降りましたから信蕃は開城を明日に延引するといふことを家康に通じ、其の快晴を待ちて翌日二俣の河邊にて双方の質を交換し悠々として開城しました、これは雨天であつては簑笠を着て開城をせねばならぬ、其の姿は武士の作法として如何にも見苦しいといふのであります。此の

信蕃の沈勇には家康は大に感じ、後に之を己が家人の列に加ふるに至つたといふことであります。

(九十六) 榊原康政の勇氣

元龜元年姉川合戦の時、徳川家康は先づ朝倉勢を攻めんとて、先陣を酒井左衛門尉忠次に命じ之に小笠原與八郎、奥平新八郎の手下を添へて遣し又菅沼新八郎の衆をも加へたのであります。而して之に繼ぐに榊原式部大輔康政を以てしました。そこで酒井忠次は命を奉じて姉川を濟り、敵を衝かんとせる際、對岸の水が深くして兵を入れ難きを察し、乃ち川を廻りて兵を遣しました。其の時榊原康政は後にありて之を見、直ちに勇を鼓して急流を渡り、無二無三に押

上り、殆ど酒井の勢と相前後して兵を進め、終に先陣を乗り越えんとしました。そこで酒井勢之を見て其の二の手に後れんことを恐れ勇を奮つて進撃し、遂に朝倉勢を打破つて大捷を得ました。かくて軍果て、後家康大に榊原の功を賞して曰く、二の手は正にかくの如くなるがよいと、これは先鋒をして自然に奮起せしめる爲であります。名將の爲す所はすべてかく迅速を貴ぶのであります。

(九十七) 菅部定盈の沈勇

菅部織部正定盈といふは徳川家康の武將であるかが其の未だ新八郎と稱して居つた頃ひ、參州野田の城下に淨古齋といへる屋舖を構へて之に楯籠つて居りました。所が一日武田直遙軒といへるが其の要

名將百話

害を攻落さんと欲し、駄峯の新三郎なる者を先鋒とし、城所遣壽といへる者を案内者として押寄せました、其の時駄峯より浄古齋までは道程一里許りもありましたのを、新三郎は早朝に用意しながら、故と三里の山道を迂り行きました、之は新八郎をして其の間に於て敵の動静を察し遁れ去るに便ならしめんとしたものであります。然るに該の山道は野田より二里許りの所であつて一望して様子を知らぬことの出來る地點であつたから、新八郎は早速其の兵を吉田の傍なる下條へ去らしめ、自分は西郷といふ處へ遁れ去らんとしました。所が何思ひけん新八郎は八町ばかり馬を進めて後忽ち人を歸して曰く、日頃好める道であれば、これより行くく鷹を据へて遊ばうと

名將百話

思ふと、之を聽ける郎等共驚き諫めて曰く、今日の場合此の如きことは無益の業でありますと、時に新八郎曰く、否とよ新八郎ほどの者が、戦に急ぎて鷹を置き去りにしたとあつては武士の面目にかゝる譯である、汝等は疾く逃れよ、予は之より引返して鷹を据へるであらうぞと、將に馬を返さんとした時、偶々敵既に来り近づけりといふに會ふたから、然らば殘念ながら鷹を据ゆることは止めて、早く煙を立つべしとて、大膽にも煙を上げて己が所在を示し、悠々として下條へ引揚げたといふことであります。この剛操の振舞を聞いて、人々舌を捲いたのであります、後遂に出世して天晴の一將となつたのであります。

(九十八) 新納忠元の自重

關白秀吉、大舉して九州に攻入るや、さしも強骨なる島津義久も其の勢威に畏れ、遂に法体となりて降を軍門に乞ひましたが、唯だ老臣の新納武藏守忠元のみは肥後の國境なる泉に在城して降參を諾しませぬ、而して主人義久に告げて曰く、天下の人衆を引受け、未だ一戦にも及ばずして降參せんことは武士の耻辱であります、されば一度は秀吉の馬をして我が國境に入らしめ、然る後に本懐を遂げたいのでありますと、之が爲に主人義久の降參せしに拘はらず、忠元のみは泉城を頑固に守りました、秀吉之を聞いて其の志を壯とし、乃ち兵を率ゐて彼の城下に押寄せた所が果して忠元の廣言せる

通り、實に一夫守れば萬卒破り難きの要害で三四里の間は馬は其の鞍を卸し鞆の緒を解くのでなくば通り難い難處であつた、そこで秀吉の軍左右なくば討入る事を得ぬために忠元は之が爲に數日を支へたのであります、所が主人降參の事全く終りを告げたと聞くや乃ち人質を出し秀吉に告げしめて曰く、今はこれ迄であります、主人既に降參の上は家臣は固より之に違ふことは出来ませぬ、さりながら今回弓矢の禮義を以て天下の人衆を引受けたことは、如何にも武士の面目之に過ぎぬのであります。とかくて後終に出で降つたといふことではありますが、其の志氣剛操にしてよく自重したものといふべきであります。

(九十九)

新納忠元の文雅



新納武藏守忠元遂に降人に出づるや乃ち知學寺に身を投じて髪を薙り自ら拙齋と號し、往いて秀吉に見へました。所が大量の秀吉は大に忠元の名節を賞して薙刀を賜ひ、且つ酒をも賜ふたのであります。所が忠元は容貌魁偉であつて鬚髯も亦甚だ美であつたから、其の酒を呑まんとするに當り、鬚が幽かに鳴りました、そこで細川幽齋席上にあつて即座に詠じて曰く

口のあたりに鈴虫ぞ鳴く

と、所が忠元は固と文雅に長じて居つたから、直に頭を擡げ、靜かに鬚を撫でつゝ

鬚を撫でつゝ

と高く吟じて酒を飲み終つたから、一座大に興あることに思ふたといふことであります。

此の忠元は驍勇を以て世に著はれたけれども性又書史を嗜み、和歌をもよくしました、されば鞍馬の間にも常に古今集を懐にし火繩の火を借りて之を讀んだといふことであります。故あるかな、即座に幽齋の詠に和したことであります。かくて後關ヶ原の役には、島

津氏が石田三成に與みした爲に、三成敗北後、薩摩の軍氣大に沮喪し、今にも隣國肥後なる加藤清正が攻め來らんとし、國中騒ぎ立ちました、その時忠元は俗謡を作りて若き男子に諒はしめ、其の志氣を鼓舞すると共に肥後勢の氣魄を奪うたのであります、其の俗謡は

肥後の加藤が來るならば、煙硝香に玉會釋、玉は何玉、鉛玉、それでも聽かずに、來るならば、首に刀を引出物

といふのであります、之が爲に遂に事なきを得たといふことであります、此の俗謡が後世頼山陽の有名なる『彈丸硝藥是膳羞客若し食饗せずんば好し寶刀を以て渠が頭に加へん』との詩となつて現

はれたのであります。

(百) 新納忠元の剛勇

島津義久入道龍伯の先鋒新納武藏守忠元は一生の間に十八度自身の鎧を合せたる大剛の武士であります、常に曰く、我等數度に及んで鎧合せの勝負をしたが、其の内三度石突を取外し、柄を短かして覺へたのである、されば柄は成るべく長くするがよいと、或時の事敵と渡り合ふたが、敵もしれ者として鎧合せの勝負中々に付かぬ、此に於て武藏守突然詞をかけ、暫らく相待たれよ、斯様の烈しき取合には、陰囊の騰るものと聞いて居るが、されど未だ試みたことがない、幸ひ只今思ひ付いたれば、冥土の物語りに探つて見んと言ひ捨

名將百話 二百二十二  
て、直ちに内股へ手を押し入れ、我等の罽丸はあるぞと叫びつゝ、  
又もや罽を合せ終に彼の敵をも仕留めたといふことであります。こ  
れ等を實に剛勇沈着とでもいふのでありませう。

(百一) 井伊直政の自重

徳川四天王の一人なる井伊兵部大輔直政が嘗て關白豊臣秀次を見舞  
ふたことがあつた、之は主人徳川家康の命に依り、天正十九年十二  
月二十八日關白に任官せる、近江中納言秀次の本邸へ祝賀として赴  
いたものであつた。時に秀次は碁を圍んで居つたが、直に直政を招  
き入れ、笑て曰く、昔は予の三好孫七郎と呼んだ時、汝も萬千代と  
いつて碁は中々強かつたと覺へる、其の後汝は長久手合戦にも頗る



手並を示したことであつた、然し今日予は忝くも關白に任せられ

たのであるから、昔日とは其の手合が違  
ふ、汝との勝負も大に面目を新にするこ  
とであらうと、傲慢の鼻を齧めかした所  
直政言下に答へて曰く、否な其の砌りは  
拙者とても無位無官の萬千代であつたも  
のが、今日にては四位の侍従になつて居  
ります、されば圍碁もさのみ昔に違ふこ  
とはありませぬと、此の一言に秀次は苦

笑ひしたといふことであります、直政の如きはよく自重して武士

の面目を保てるものといふべきであります。

(百二) 井伊直政の沈勇

關ヶ原役の時、一方の大將たる井伊兵部少輔直政は只だ一騎にて物見に出ました、偶々先陣なる福島正則の家人大道寺内藏介も全じく物見に出で之に行合ひましたから、汝は何者なれば人の武者先に打出るやと尤めました、その時直政之を聽き徐ろに曰く、予は御旗本より參つたる井伊兵部少輔であると、大道寺之を聽くや、スハとて直に馳せ歸りて福島先鋒武藤に語り、之を追散すべきや否やを以てしました、其の時武藤曰く、否やく其の分にして置くがよいとそこで内藏介止むなく又乗出して以前の場所に到つた所、直政尙は

二騎を従へ、物をも言はずに見積りをして居りましたがフト大道寺を見るや會釋して、最前の儘未だ罷り在りますと告げ、少時くして鐵砲がさがつたとばかり言ひ捨て、己が陣營へと乘戻しました、其の時の供の二騎は早川彌三右衛門幸豊、廣瀬郷右衛門景房であつたといひますが、さても物に動せぬ大將の振舞と二人は大に感じ入つたといふことであります。

(百三) 青木一重の心掛

青木民部少輔一重は徳川家康の武將であつたが十八歳の時に一方の將として討て出で、敗北しました、其の時一重は早速令を傳へて曰く、何れも鎧をかたげよ、場所を見合し、取て返して敵を追崩すの



である、衆そこで命を奉じ、皆鎧をかたげて退きました所、敵案の如く列を亂して追撃しましたから、一重は急に命を下し、踵を廻らして敵を追崩しました、そこで衆皆其の主人の機智あるに服したといふことであります。

又或日古田大膳といふ武將が一重に向ひ、聞く所によれば足下は曾て越前大剛の武士眞柄を討取られたといふが、抑々當時の戦況は如何であつたか幸ひに承知を致したいと、其の時一重笑ふて答ふらく仰の如く眞柄といふは大力無双の士で固より予等如きに討たるべきものでないが、當時重傷を蒙り且つ疲れて居りましたから、幸に渠を討取ることが出来たので、決して戦況などの語るべき者はありません。

ませぬと、之を聞いて世人は尤も飾りなき有体の申分、されど其の辭讓の振舞一入感に絶ゆといつたとの事であります。

(百四) 京極高次家老の勇敢

京極宰相高次が天津籠城の砌り、大阪方であつた所の立花宗茂等來つて之を圍み攻め、其の兵進んで二三の城廓をも乗り越へ、將に牙城へ迫らんとしたのであります、其の時家老の赤尾伊豆といふは之を見て憤然として曰く、かく空しく敵の爲す儘に任せては武士たるの面目が何處にあるか、奮發せねばならぬといつて、決然起ち上つて部下二十騎を率ゐ、驀然に敵を蹴破つて之を追ひ崩し、忽ちにして其の二三の城廓を回復し、それよりして悠々と敵と和を講ずる

やうになりましたから、世人は其の勇氣を稱し、これ即ち必死即生なりといつたとの事であります。

(百五)

青山清長の功名振

關ヶ原合戦の砌りに、福島左衛門太夫の陣所より物見「斥候」として澤井左衛門尉雄重、森勘解由成之を遣し、之が横目役「監視」として祖父江法齋を添へました。所が石田三成方の物見役なる乾次郎兵衛、澤田小三郎兩人が丁度來合し、互に詞を掛けたが、固より敵同士の事なれば、其の方共能々物見して關東勢に後れを取るなどいへば、又おのれ等こそよく逃路を見置けなどと答へ、終には争論の末、森、澤井等先づ拔きつれて打てかゝれば乾、澤井も負けて居

す、又扱合せて茲に双方馬上にて切結ぶこととなりました。其の時祖父江法齋は之を見るや、忽ち刀を抜いて敵味方の真中へ斬り入り大聲に呼はつて曰く、惣て物見は敵合の様子、地形の善惡を見定め馳せ歸つて大將に告ぐるのが其の役目であるに、汝等は如何にしたものであるか、かく私の争ひの爲に勝負をするといふのは何事であるか、かゝる私闘はたとへ高名したりとて役目の外なれば、何にもならぬ、反て不忠の至りであらうぞと、かく諭しつゝ、終に切拂ひく双方を追かしました。此の思慮ある一言に双方とも道理至極と引分れて皆乗戻しました。そこで時の人法齋の仕方實に天晴なりと稱しましたが、此の事家康の耳に入り、戦争終つて後やがて法

名將百話 二百三十  
齋は旗本へ召出され、新に青山石見守清長と改名して仕へることゝなつたのであります。

(百六) 六角義郷主従の廉潔

關ヶ原の役が終つて徳川家康大阪に留まり、今度凶徒退治したりとて、其の祝として諸大名に出仕を仰せ付け對面を許したのであります。そこで近江の六角少將義郷方へも使者を遣して之を招きました所が義郷早速返書して辭して曰く

御使者誠に過分の至り、弓矢の面目之に過ぎず、乍去仰せに隨ひ、義郷只今罷出候はゞ、世上にて三つの難を噂申すべく候。仔細は石田治部少輔等秀頼の御頼みに付、北國表の大將仕り候

へと言ひ送りしを領掌せず、軍散じて罷出候はゞ、臆病者と沙汰致すべし、これ一ツ、内府「家康」へ何の御由緒もこれなきに御恩に預り候はゞ、時の競ひに従ふ追従者よと申すべし、これ二ツ、我等只今浪々として罷り在れば、糧乏しく難儀の餘り諂ひ出づと申すべし、これ三ツ、此儀を存じ候へば、大海は防ぐとも、人口は拒ぎ難しと古人も男傳へ候間、得こそ仰せに従ひ申間敷候

此の潔き返書を見て家康歎じて曰く、六角家は今の世の聖人とも申すべき方々で、其の廉潔他に比すべきものがないと、かく家康が譽めたのは今一つ義郷の舊臣樂鎮なる者の振舞に感じたからであり

ます。

これより先き關ヶ原の敗戦後、安國寺惠瓊は毛利秀元と共に土岐多羅より江州八幡まで退散し、鞍馬の月照院は自分の推舉した弟子であればとて、獨り袂を分ちて北近江より山越にて鞍馬に入りました。然るに住僧の待遇が思ふやうになかつたから、やがて月照院を去りて京都に出で、七條邊の寺院に入りて隠れて居りました。所が偶々江州六角家の舊臣にて世を遁れたる樂鎮といへる者が全寺にて安國寺の姿を認め、早速奥平美作守信昌に訴へ出たのであります。そこで信昌は直に家人鳥居勝右衛門に命じ、人數を差添へて之を召捕らせました。此に於て樂鎮訴人の功を賞し、之に知行を下さるべき由

申渡された所が、樂鎮受けずして曰く、否とよ私 が安國寺を訴へ出たのは恩賞に預らん爲ではありません、先主人なる六角少將は石田治部少轉、安國寺等の讒言によつて、本領を取上げられ浪々の身となられたのであります。それで御主人の遺恨を散せんが爲に、かくは其の潜伏所を告げたのみであります。即ち彼者さへ亡き者としなれば、千町萬町の御恩を受けたと全前でありますと、家康之を傳へ聞きていかにも正道なるものとし、さらば當座の褒美にとて黄金五十枚を下されました。其の時樂鎮は之をも辭み、かくては訴人に似たやうで心卑しう御座いますとどうか此金は御辭りを致しますと、將に其儘歸らうとしました。そこで役人止むなく強めて言合め

無理に拜領せしめました所、樂鎮是非なく之を納め早速之を兩替して車に積み、之を己が居宅に運び入れ、さて召使は固より、近邊の寺々里人にまで残らず之を分配して我身には一錢も受けなかつたといふことであります。當時黄金一枚は十兩三分なれば五十枚は五百兩餘にもなつたのであります。此の廉潔を家康が聞いて愈々感じ入つて居つたのであります。

(百七) 真田幸村の智謀

織田、徳川、北條の三大將が真田の籠れる信州上田城を攻落さんとて、押寄せた時、何分真田の智謀に當り難いといふので、是非なく遠攻にしました。之が爲に昌幸大に困じ果て、かくては所詮糧食

に事を缺くに立到らう、籠城は心元ないと歎息しましたのを、倅幸村冷笑ひ、今宵某し敵兵を欺き必ず一汗流させて見ませう。されば父には本丸にありて篤と御覽候へと申しました、そこで昌幸、然らば汝宜しきやうに取計へと申渡しました。そこで幸村は松浦七郎、荒川勝藏、畔柳九藏、海野六郎兵衛、望月太郎左衛門等に命じて城の後の山嶺さへ、炎々と明松を點させ、上田の城より越後路へ落行く体を示しました、それを三方の奇手、望み見て、さては真田昌幸籠城叶ひ難く、越後へと落行くものであらう、いざや追駈け来て武器を剝ぎ取るであらうと、一人、言ひ出せば聞く者之に附會し、これ真田は上杉方へ落行くと覺えた、早く追かけて高名せんと、思慮

浅き面々我もくと之に附隨し、三方より明松を目當に進み近づいて見れば、馬鹿々々しくも、唯だ此處彼處に松明が結びつけてあるばかりで、一人も来て居りません、之は不審と眉を擡めたが、長居も無益と、諸軍勢、陣に立歸らんと元來りし道へ差掛つた所、道は一面の火であつて、歸るべきやうもない、そこで諸勢大に仰天し、如何はせんと狼狽騒ぎ、峰に傳ひ、谷に彷徨ひ、人馬上を下へと騒動して猛火の中に苦む状は、地獄の責もかくやと思はれて恐ろししと思はぬ者はなかつた、そこでかくと見たる内に杭木に結び付し明松を焼き盡して地に落た所、豫て設けてあつた地雷火が一度にドツと發したから、何條たまるべき、山は一面の火炎となりて燃上り、

織田、徳川、北條の軍勢之が爲に焼死する者數知れぬほどであつたといひます。

(百八) 眞田幸村の高義

眞田左衛門佐幸村は大阪方の勇將であります、徳川家康之を惜み且つ恐るゝこと甚だしく、其の叔父眞田隱岐守信昌を以て之を招かしめ、大祿を賜ふといふことを以てせしめました。時に幸村答へて曰く、以前高野に隠れて居つた時、種々と出仕の事を豊臣氏に願ふたけれども許されなかつた、所が今回秀頼公に招かれたのであるが固より予の本意ではない、且つ籠城の上は始終勝利があるとは思へぬ然しながら武士として一旦加盟を誓ふた上は、之に背くといふこと

は固より爲すべからざる事である、されば幾度仰せがあるとも全心  
 することは出来ませぬと、されど徳川よりも懸望篤ければ信昌又も  
 や幸村を召して之と會談しました、其の時幸村兎角の挨拶もなく、  
 漸くにして曰く、義の在る所には、假令天下に天下を添へて下さる  
 ととも背くことは出来ませぬ、やがて時を得たならば天下の頭とな  
 り、其の時に家康に對面するでありますと、かく言ひつゝ呵々と  
 大笑ひしたといふことであります。

(百九) 木村重成の技倆

慶長十八年十二月二十二日大阪冬陣の和議整ひ、徳川家康父子誓詞  
 を豊臣秀頼に納るゝこととなつた時、秀頼は判元の見證として木村

長門守重成に郡主馬良列を副へ、茶白山なる家康の陣營に到らしめ  
 たのであります。其の時に誓詞出来上り傳長老之を讀み終るや、家  
 康小刀を持てと命じました、そこで板倉内膳正之を聽き小刀櫃に  
 手を掛けんとしましたが、やがて勿体なしと思ひ、小刀のない風情  
 をしました、其の時本多上野介曰く、小刀は悪う御座います、針の  
 方がよろしいと、折しも阿茶局并にお勝殿が入り來りました、既  
 にして血判成るや、長門守曰く、御身血を加へさせられたる義秀頼母  
 子如何に思はるゝことやらん、然し既に遊ばされたる物であります  
 れば持參致しませうと、乃ち誓詞を手にして一見しましたが、やが  
 て曰く、御血判が微かであつてハッキリ分りませぬと、直ちに上野

介のすけに向むかひて曰いはく、最前さいぜん申まを上げました通り御身ごしん血ちを染そめられる迄までには及およばぬことよは思おもひまするが、何分なにぶんにも母義ぼぎ『淀君よどぎみの事こと』女心めんなこころにて自然しぜんに不審ふしんも致いたされませう、逆さかも遊あそばされるものならば、今少いますこし確たしかに見みへるやうに血判けつはん致いたして貰もらひたいもので御座ございますと、家康いえやす之これを聞き、乃すなはち木村まむらの望のぞみ通り、ハツキリ血ちを誓詞せいしに染そめて之これを渡わたしました、後日ごじつに家康いえやす大おほに重成しげなりの振舞ふるまひを稱ほめ、上野介かうづけのすけも亦また、長門守ながとのかみは實じつに常陸介ひだちのすけの孫まごほどあると大おほに稱揚しょうやうしたといふことでもあります。

(百十) 薄田兼相の憤慨

薄田隼人すくまたはやとのすけかねすけ佐兼相さかねさへといふは小説しやうせつにていふ岩見重太郎いはみぢゆうたろうの事ことであつて、大坂陣さかざんの時とき豊臣氏とよとみうぢに招まねかれ一方いつぱうの大將たいしやうとなつたのであります、されば

冬陣ふゆぢんの時ときには秀頼ひでよりの命いのちを受け、中國西國ちゆうごくさいごくの敵てきを押おさゆるために、番船はんせん



の下知げちをしたのでありましたが、徳川とくがわ方かたなる蜂須賀阿波守はちすけあはのかみの爲ために散々さんざんに責せめ立てられ、僅わずかかに身みを以もつて城中じやうちゆうに逃にげ込んだのであります、これは水軍すいぐんに不慣なれであつたからであります、かくて一旦いつたん東西とうざいの和議わぎが成なり、翌年よくねん春秀頼はるひでより、衆勢おほぜいを城中じやうちゆうに會あひした時とき、兼相かねさへも席せきに列らりました、其そのの時とき十二三歳じふにさんさいなる小禿こかぢうが大なる柑子かんし一顆いつこを手てにして之これを兼相かねさへの面前めんぜんに持もち來きたり、告つげていふや



二百四十二  
名將百話  
う、さてもうつくしい物ではありませんせぬかと、そこで兼相も笑ひながら成程立派で御座ると答へました所、小禿乃ち曰く、此の大柑子は人間に譬へていへば隼人佐殿のやうで見えたる所は如何にも潔きよいのであります、内心は誠に悪くて食物にもなりません、表面と底とは大なる相違であります、此の一言に兼相大に驚き、赤面して退出しましたが、大に之に憤慨して全じく夏の陣には道明寺口にて拔群の働をして敵を惱まし、花々しき討死を遂げたのであります、傳ふる所にては右の小禿に智恵を付けたのは大野修理亮の指金であつたといふことでもあります。

(百十一) 後藤基次と藤堂高虎

名將百話  
二百四十三  
岐阜城を攻破する時に、黒田、田中、藤堂等の諸將は犬山城を押へて居りましたが、犬山終に城を明渡したから、諸將は岐阜に打向ひました、所へ大垣よりも石田、島津の二萬人ばかり打て出て來ました所が八月の大雨の後で、合渡川の水嵩増さり、中々容易く渡れさうにもありません、そこで諸將香ヶ島の札の辻に控へて、評議を凝し川を渡さんか、敵を待て戦はんかと區々に論じて居りました、折しも銀の天衝の立物打たる冑を着、黒ほろ掛けたる武者一騎來れるを藤堂高虎認め、アレこそ黒田家の士大將後藤又兵衛であらう、彼の存する旨を聞いて見やうとて扇を揚げて招いたから、後藤はほろをゆりかけて來り跪き仰を待ちました、そこで高虎曰く、いかに

此の川を渡るべきか、待て利あるべきか、先の程より評定するも決せず、如何にぞやと、其の時後藤打笑ひ、評定も時によります今日の岐阜攻に後れ又爰にて一戦せずば徳川内府に對する御面目がありますまい、川を討死の場と定めらるゝがよろし、さうでなくば男子ではありませぬと大言したから、諸將も尤もなりとて、遂に川を渡して戦ひ、最後の勝利を得たのでありますが、基次はかくの如く決断の速い大將でありました。

子息高次へ教誡 (抄録)

藤堂高虎

一 御奉公の道油断あるまじき事

- 一 孝行の道忘却あるまじき事
- 一出頭衆へ節々申通すべき事
- 一 弓鐵砲馬以下家職の道忘るべからざる事
- 一身の分限程萬事其の沙汰あるべき事
- 一 若者の遊山好み、然るべからざる事、御奉公の道油断なく候へば、遊山がましき事も存せず、又徒然なる事も無レ之事
- 一 振舞にむざと來るまじく候、但し斟酌ならざる所へ參り候は、長酒無用の事
- 一 各御尋の刻は罷り出づべく候、虚病を構へ随意なる心持然るべからざる事

一孔子の道を心掛け、日本記にては東鑑式條なども聞き可申事  
 一大事の御國を預り在る事に候間萬事油斷仕るまじき事  
 一上下ともに能人といふならば及ばざる迄も似せ、上下共に惡きといふ人の眞似假初にも仕るまじき事  
 一常々能き友と咄し、異見をも請可申候、善惡は友によると聞候  
 一惡しき友は何事も譽め、異見がましき事も申さぬ物に候、夫は佞人にて候間、愛し申まじき事  
 一家中の者奉公の忠不忠、善惡を能く見知り、又君へ御奉公の心持これあるべき事  
 (中略)

一仁義禮智信一も欠けては諸道成熟成るべからざる事

右の條々不斷心にかけ、文武兩道の嗜專一に候、合戦を心に掛候といへども、常に稽古成らざる事に候、切に功者其道を知りたる人により雑談を聞き其心持あるべく候、座配付合の刻、大人を敬ひ、老人を愛し候事、尤に候、我が利根に迷ひ、他人を嘲る事然るべからず候、盤の上敷寄亂舞、能以下も、能き程に然るべく候、何の道にも一偏に片付候事は聞へ悪く候、其上御奉公の障りにも可成候間、其心持肝要に候の條、能々心持あるべき者なり。

(百十二) 淺野幸長と上田宗固

上田入道宗固といふは尾張國星崎の出身で甚左衛門重光の子であります、初めは丹羽長秀に仕へ、紀州雜賀一揆を退治として長秀に従

ひ出陣しゅつちんしましたが、偶々たま明智光秀あきらみつひでの逆心さかしくしんにより、長秀ながひでが紀州きしゅう鷲じゆの森もりの陣ちんを拂はらひ、大阪表おほさかおもてへ馳のほせ登のぼつて、織田七兵衛おだべゑ信澄のぶすみを討うつや、宗固そうこも從軍じゆうぐんして先登せんとうし、信澄のぶすみを討うち取りました、かくて幾いくばくもなく豊臣秀吉とよとみひでに從したがひて其そのの臣しんとなり、關ヶ原せきがはらの役やくには西軍せいぐんに屬ぞくし、石田方いしだかた敗北はいぼくするや宗固そうこも浪々ろうろうの身みとなつて零落れいらくして居ゐつたのであります。然しかるを淺野紀伊守幸長あさのまきのかみゆきなが之これが剛勇がうゆうを愛あいし一萬石まんごくを以もつて之これを召抱めしかへました、そこで淺野家の家臣等あさのけかしのら誹そしつて曰いはく、いか様檀那さんなんも大名だいめうである、茶道ちやうだう坊主ぼうずを一萬石まんごくで抱かへられたとは、高たかき茶吞ちやのみ相手を得えられたものであると、之これは主水宗固もんずいそうこが隠かくれもない茶道者ちやうだうしやであつたからであります。此この噂うはさを紀伊守聞きいのかみきかれて宗固そうこの志こころざしを憐あはれ、一日いちじつ家臣かしのら一全出仕いちぜんしゅつしの砌せき

り、宗固そうこを招まきて曰いはく、此この頃ころ若わかき者もの共どもが兎角とかくの評言ひやうげんを致いたすければ、心こころに懸かけることではない、若もし一旦いつたんの變へんがあつたならば彌々いよ頼たのみ入いるぞよと。手てづから指料さしりやうの脇差わきざしを賜たまひました、そこで宗固そうこ之これを押戴おしいたき、御懇情ごこんじやう何なんとも申述まをしべやうも御座ございません、若もし急變きゆうへんの出來できました時ときには、必かならず此この脇差わきざしに血ちをつけて御芳恩ごほうおんの程ほどを報むくひますと厚うく御禮おれいを申上まをしあげました、そこで家臣かしのら之これを見て又また曰いはく、宗固そうこの血ちといふのは鼠ねづの血ちか乃な至しは猫ねこの血ちであらうぞと、愈々いよく之これを嘲あざり笑わらふたのであります、所ところが幾いくばくもなく紀伊守卒きいのかみそつし、日ひならずして大阪おほさかの夏なつ陣ちんとなりました時に、大野主馬介治房おほのしゅまのすけはるふさが一萬餘まんよの兵へいを率ひきゐ、大阪おほさかを出いで、大和郡山やまとこほりやまに向むかひ、それより沿道えんだうを燒やき掠かすめました、そこで淺

野但馬守長晟泉州志立へと發向し、四月二十九日に佐野にて大野の軍と出會ひました、乃ち直ちに戦争が開かれたのでありますが、其の時大阪方にては有名なる塙團右衛門直之討死し、岡部大學、金丸小傳次等も奮戦して紀州勢を追ひ立てました。そこで淺野の家人上田主水入道宗固と龜田大隅守高綱取て返し、双方互に亂れ合ふて大戦となりましたが、龜田は不幸にして大阪方の勇兵松浦作左衛門と槍を合せて内股を突かれたけれども、宗固は一番槍を合せて山縣三郎右衛門といへる剛の者を組討にし、又宗固の家士の横關新三郎も奮闘して殊の外なる大功を立てました、そこで大野勢は之が爲に破れ退いたのであります。此に於て宗固は首級を實檢に供へて過分

の褒賞を受けました但其の時諸士列座の前にて曰く、我等事、先年當家へ抱へられた際は茶道坊主として笑はれ、再び脇差を拜受して又もや嘲りを蒙りましたが、今日は幸に手柄を致しました、日頃武士道を一圖に嗜まるゝ衆中は如何で御座るか、茶道の宗固に劣りたまふては更に武邊も見へぬではありませぬかと、そこで満座爲に閉口し、一人も會釋する者がなかつたとの事であります。之は幸長の眼識の高かつたのと、宗固が忍耐して耻をこらへたから、此日の働があつたのであります、後ち宗固は家康に召出され舊の主水となれとて刀脇差を賜ふたから、乃ち子息兩人の中一人は淺野家に仕へて代々主水と稱し、一人は秀忠公に仕へたといふことでもあります。

(百十三) 徳川秀忠の沈勇

徳川二代將軍秀忠が、或日江戸城中にて能樂の催しを見て居つた折しも、俄かに大地震があつて貴賤男女、狼狽へて大騒ぎをいたしましたされど秀忠には舉止毫も平時に異ならず、自若として男女の騒ぎ合ふのを眺めて居りました、其の時に青山伯耆守は幼主の御身大切なりとて、急ぎ入り來りて家光を控へて去りました。それを秀忠が見て甚だ不興氣でありました。後日秀忠は侍臣を戒めて曰く、すべて人は平生より膽氣を養はねばならぬことである、さうでない時にはソレ喧嘩、ソレ氣違ひ、火事、地震、雷などといつた時に不慮の事なりとて其の心轉倒して覺えすも不覺を生ずるものである、曩の日

の地震の如きも甚だ之に似て居るではないかと、諭されたので諸士之を聽いて何れも顔を赧らめたといふことであります。

(百十四) 徳川秀忠の仁徳

徳川二代將軍秀忠は薨去の前年、亥の子の夜より氣色すぐれず、餘命測り難しと觀じ、病を推して政治を視て居りました、されば脇差の如きも之を傍に置き、身には寸鐵をも帯びずして坐て居りました、老臣共之を見て諫めて曰く、數多き伺候者の中、若し狂氣亂心の者を生じたならば大事に及びませう、されば短刀だけにても御腰を離さずして燕坐あるがよろしいと、秀忠之を聽いて曰く、予が病を推して出仕するのは、之を臣下に示し、最早本復覺束なく、永さ

別れになることを思はせん爲である、且つ坐所の守護は固より之を爲す者あり、又昵近の士も多いことであるから、聊か心配することはない、一体、天下は天下の天下であつて、強ゐて天下を擅まゝにするのではない、唯だ晏然として天命を待つのみであると、之を聽きたる諸士の面々何れも其の仁徳に服したといふことであります。

(百十五) 徳川秀忠の恪謹

二代將軍徳川秀忠一日打寛いで座談をしたことがある、其の時には親藩の某侯が側に侍して居つた、そこで將軍曰く、予に一の願があるけれども、どうもすることが出来ぬと、某侯曰く、何でありますかと、將軍曰く、殿守に登て鼓を打つたら快きことであらうと

そこで某侯曰く、それは甚だ安いことではありませぬか、何故に早く爲さらぬかと、將軍答へて曰く、予鼓を殿守に打つたならば、城下皆之を好むに至らう、城下之を好んだならば全國之に倣ふに至らん、予それ故に爲さぬのであると、之は秀忠少時鼓を好んだが將軍となるに及んで復た之を手になかつたから、此の言を爲したのであります、かくて秀忠は歳五十に至りましたから或人之に勸めて少しく安樂を爲さるがよいといつた所、秀忠答へて曰く、卿等は老ひて安樂するもよからうが、予は位將軍となり、天下の望み見る所となつて居る、されば天下を治めることの外他を顧みることが出来ぬ、これ日夜に勉むる所以であると、世人聞いて其の仁徳に服した

といふことであります。

(百十六) 大久保忠教の深慮

大阪夏陣の時徳川方の旗奉行は保坂金右衛門、庄田三左衛門の兩人でありました、然るに最初命せられたる本道を押進まず、爲に家康以下途なき地を過ぎ、辛うじて茶白山へ着したのであります、そこで兩人共大に叱責せられたのでありますが、其の時成瀬小吉曰く、保坂は肥太つたる老人であれば、かゝる誤を生じたものであらう、旗奉行の如きは何でも強壯の者を用ひねばならぬと、所が當時の鐘奉行は世に名高い大久保彦左衛門忠教と若林和泉の兩人であつたから、之をも叱責せんとて、旗も鐘も逃げたものであらうと評せられ

た、其の時彦左衛門肯かずして曰く、否々決して逃げはせぬ、譯もない上意であると、之を聽いて家康は苦笑ひしたけれども、彦左衛門は兩度までも決して逃げぬと言ひ張つたから、此に於て家康大に怒り、刀を持って命じた、之を永井右近大夫が見て主人の氣色に驚き、彦左衛門を擁へて次の間へ退き、僅かに事なきを得たのであります、其の夜高木善七郎守久が彦左衛門を訪ひ、之に問ふて曰く何とて晝の程は強情を張られたか、上意の如くに旗の間に合はなかつたのは紛れもない事ではないかと、其の時彦左衛門答へて曰く、其方若年にて之を問はるゝこそ奇特の至りである、さすがは主水性順の孫ほどある、さらば某が所存を語らう、元來此度の出陣に旗の



遅かつたのは歴然たる事で殿の立腹は道理至極である、されど逃げたと世上へ聞へて果してよいものか、悪いものか、必ず御旗逃げたりとはいはずして、大御所の逃げられしものと沙汰をしやう、最早七十にも餘らせられ、御逃げなされたと世の人の口に掛れば、何として仕返しとなる事ぞ、今迄の武勇も之にて水の泡となつて仕舞はねばならぬ、かくては末代までの名折ではないか、然れば逃げ申さずと確かなる證據に立つた我等一人は若し斬らるゝならばそれにてよい、何故ならば大事の弓矢に永代疵を付けずに事が済むからである、それで御手討を本望と思ふての今日の仕儀である、其方などは年も尙ほ若く、後來御側の奉公をも勤めらるゝことなれば、向後か

ゝる處に心を付けらるゝがよいと、此の思慮ある一言に高木は大に悟る所があつたといひます、後日家康が之を耳にするや色を和らげて曰く、彦左衛門は兎にも角にも情の強いのか疵であると打語つたのみで、亦何を言はなかつたといふことであります。

(百十七) 徳川頼宣の知言

大阪の役起つた時徳川家康の第十子頼宣は年十三にして軍に従ひましたをして、接戦の期に及んだならば、其の先鋒に列せんことを思ひ、屢々諸將に約束して置きました、然るに幾くならずして和議成り、塙直次来て之を頼宣に報せました、そこで頼宣聞いて掌を撫せ、和議果して成つたが、天下の爲には賀すべきであるが、予に在

ては遺憾千萬であるといつた直次之を聞いて曰く、公何をか憾み玉ふや、頼宣曰く、嚮きに予の二條城に在り、初めて甲を擡る時太公『家康』親ら予の爲に甲を着せ、辱くも容儀の壯なるを祝して下されたのである、されば、此の役には必ず奮戦して其の祝辭に報ひんと思ひ、日夜勉強して待つて居つた、然も今や和儀成るといふは惜しいことではないかと、そこで直次曰く、是れ誠にさうでありま

す、然し公の如きは之を譬ふれば未だ蕾の花であります、これより屢後々公の志を成し玉ふ時ありませうと、時に頼宣叱て曰く、予の十三歳の時が再びあるかと、直次聽いて恐れ服したといふことであります。



紀州侯徳川頼宣は南龍公と稱せられ一世の英主でありましたが、常に己れを空うして能く人の諫を容れ、善に従ふことは水の流るゝ如しと傳へられました、されば嘗て侍臣に語て曰く、人の言ふ所の中其の善き所を撰んで之に従ふたなれば、則ち衆人の智慧は即ち我が智慧であるとこれ知言であります、かゝれば一日出で

天寒うして雪が降て來ました、公止むなく

鷹を放たんとした時、

道傍の寺院に入り之を避け、従ふ者は皆庭上に立ちて其の衣も袖も盡く白うなりました。そこで老臣公に白して曰く、風寒く雪をふらし従者皆疲れて居ります、宜しく明日に御延し遊ばしてよろしからうと、公乃ち之に従ひ歸られました所、途中にて風止み雪全く霽れました、従者共そこで咎を老臣に歸しました所公聽いて曰く、梟や雁を千百得たよりも一言を得たのには如かぬ、何も咎めることはない、人々其の人言を納るゝの度量に服したといふことであります。

父母狀

徳川頼宣

父母に孝行に法度を守り、へりくだり奢らずして面々家職を勤め正直を本とすること誰も存じたる事なれども、彌々能く相心得候様に常に下へ教へ可ニ申聞一者也

子正月 日

梅溪欽書

徳川四代將軍家綱公の萬治元年紀州熊野山中にて、父を殺して其罪を覺らざる樵夫ありしを、國主南龍公頼宣聞いて、己が教化の治ねからざる故とし、儒者李梅溪に命じて其罪人の爲に孝經を獄中に講じて三年の後其罪を自覺せしめ、爾後再びかゝる無知者なかるべしとて前掲の教訓を其領内に下し、士民をして之を遵奉せしめしものにて、其の教訓の頭に父母の文字あるを以て後世、父

母狀といへり。

(父母狀演義)

(百十九)

本多正信の公正

本多佐渡守正信は徳川氏の武將でありましたが又文事にも長じ、遂に京都の所司代となつたのでありました。所が性至て公正の人でありましたから、懇意の輩が公事訴訟などを内談を爲すときには常に意見を加へて其の訴を止めしめました、而して曰く、予苟も司直の任にあれば汝等懇意の輩の訴訟を判決し、若し最負の沙汰があつたなど、百人中に一人にても批難するに至らば、爲に上を煩はさねばならぬ、然れば當分利があつても後日の害を生ずることである。寧ろ始より訴をなさぬに如かぬからであると、又一日最愛の娘を

失ひました、佐渡守時に愁傷甚だしかつたが三日目に至り、早くも公事を聴きました、そこで家康見て曰く、佐渡は女子を喪ひ歎くべしと思ふたに、早や主用を達して居るか殊勝の至りであると、正來之を聴いて曰く、娘の果てたのは私事であつて、公事は私事に拘はるべきものでない、されば私事の爲に上の御用を缺く如きことをしてはならぬと、人々傳へ聞いて其の志を稱したといひます。

(百二十)

井伊直孝の眼識

江州彦根の城主井伊掃部頭直孝は徳川氏の股肱で戰國以來の勇將でありました、一日遠乗の爲として早朝馬に乗て出遊しましたが、或る處にて家所の極粗末なる屋敷の門前で最も健かに見る男が馬の湯洗

ひをして居るのを見ました、そこで掃部頭差覗きて其の家主の名を問ひました所、何の某と答へました、さては百五十石を領して居る身分の者かと、首肯いて歸りましたが、歸城勿々某を召出し、之を大に賞めて曰く、其方、家居は見苦くして人馬の分限に過ぎて遅しきは如何にも感心である、家居が綺麗であつたとて、事ある日に家に乗ては出られぬ事である、されば其方の心入れ一段と神妙である、今日より一倍の加増を申付くるから、よく唯今の心掛を忘れず、忠勤を勵むやうにと、やがて其の祿を増しました、そこで某感泣して其の恩を謝しましたが、それより一家中彌々以て無用の美麗を止め、一に武藝を競ひ磨くやうになつたといふことであり

ます。



(百二十一) 池田信輝の剛勇

池田勝入齋輝政は戦國時代の英雄でありました、一日圍爐裏に對し、獨り自ら栗を焼いて食べて居りました所へ、偶々其の子息三左衛門信輝の其の頃十一歳となるが來て父の側に跪きました、それを父輝政ながめて曰く、栗所望かと、信輝乃ち曰く、所望で御座いますと、輝政乃ち火箸にて焼栗を取出し其の儘に之を差出しました、其の時信輝は毫もひるまず、小さく手を

以て之を受取り、更にあつといふ氣色もなさずして徐かに之を食ひ了りました、そこで世人其の勇氣に感じ實に桒檀は二葉より香しとは此の事であると、忽ち四方に傳へくと云事であります。

(百二十二) 池田信輝と伊木清兵衛

池田三左衛門信輝の老臣に伊木清兵衛といふ忠誠の士がりました其の末期に望み主人を戒めて曰く、公には毎々堀出し物を好み玉ふ癖があります、堀り出し物は多くは役に立たぬものであります、深く之を嗜み玉ふてはなりません、殊に武士の堀出し物はよからぬもので、満足に働くものではありません、總て武士は其の分限より一際能く扶持してこそ永く其の家を去らずして、忠勤を屬むもので

あります、されば長く恩顧を被せた武士に限りませんが、唯だ此際臣の心掛りなのは、唯だ此の堀出し物の一事であります、信輝之を聞きて心に思ひ當るものゝ如く、暫時考へて居りましたがやがて曰く、通理至極である、よくも申し呉れた、其の志海よりも深く、山よりも高いと、厚く禮を述べたといふことではありますが、かくの如く君臣水魚の間にてこそ、始めてよく一旦の變に備へることが出来るのであります。

(附録) 名將茶談

其一

豊臣秀吉と徳川家康

徳川氏は元來豊臣氏と正反對に質素儉約を旨としたものであります  
が、矢張家康も秀吉も茶の湯に凝りました、之は茶湯を善用したも  
のであります、晩年織田有樂齋を屢々駿府に招き茶會を開いたこと  
は日記に存して居ります、さてこそ家康が茶湯によつて其危禍を免  
れた逸事があります、或年秀吉伏見に於て家康、利家、氏郷等を饗  
したる後、これより聚樂に往きて共に傲遊し歸路には徳川殿方に立

寄りて饗應に預らうとあつたゆゑ、家康は忝しとて急ぎ家に歸り  
聚樂にて美食の上なれば只だ茶を奉るべしと、堂を拂ひ庭を洒ぎ自  
ら壺の口を切り、茶一袋を茶道朱齋に挽した後、翌日愈々大閣の御  
成とて、早く坐を起ちて歸り挽茶を見るに甚だ少い、即ち朱齋を召  
して之を詰つた所が、水野監物之をたべ候と申上げた、監物は家康  
寵愛の美童なれば怒りもせず、さらばとて別に壺の口を切り、一袋  
を出して茶道休閒に挽かしめました、然るに間もなく太閤御成とあ  
つて急の用に立兼ねるを虞れ、加々爪隼人が家康に向ひ、初の茶減  
少すれども侑め奉るほどはあり、休閒の茶挽止むべきかといひまし  
たのを、家康叱して、汝無禮を申すな、予が近習なれば予の口眞似

をすべきを、さばかりの心得なくて何とする、縦ひ茶を挽くこと遅くして太閤徒に歸らるゝとも、不興は一時にて濟むべし、人の飲みたる飲餘りを侷める道やある、其志ならば、汝の奉公も正しかるまじと戒め、悠悠茶を拵へさせて新に秀吉に勧めました、そこで皆々其律義に感じ入つたといふことであります、家康の細心は、かくて屢々奇禍を免れ、終に大事を成就したのであります。

其二

豊臣秀次と徳川秀忠

徳川秀忠に至つては其主従の間に更に思慮深き趣があります、文祿四年關白秀次謀反の企ありとて太閤の嫌疑重なり、今は早晚此人失

はるべしと噂し合へる時、秀忠當時十七歳中納言として京師に留まつて居りましたのを秀次此人をたばかつて擒とし、家康を仲人に立て、讒言を申被かんとし、四月三日の曉使を秀忠方に立て、今朝の朝餉參らせん、昨夕より仰あるべまを事に紛れて後れたり、申遣せば大久保忠隣心得て、使者に對面し仰せ承れり、されど秀忠未だ幼く、いつも日たけて起出づる習なれば御返事遅々に及んでは憚多し、先づ御歸館あれ後刻返事すべしとて使者を還し、其間に土井利勝をして早速秀忠を伏見の館に赴かせ、忠隣獨り留まりて關白の使を待受け、使者再三に及んで後、忠隣對面していふやう、秀忠儀豫て言合はする人あつて茶の會せんため、今曉伏見に赴けるを忠隣



名將茶談

さる事とは存せず、例の如く日たけての起出でと心得再三使を煩  
 したことに返すくも恐入りました、と打詫びました、それ故使者怒  
 るに怒られず、空しく其儘に引返し、秀次も此事午時に知りては最  
 早秀忠を伏見より迎へん便なく、口惜き事に思ひ居るうち、やがて  
 罪を獲て高野山に遁れ、七月十五日自殺するに至つたのであります  
 かく秀忠がうまく虎口を免れたのも茶道の徳であります。

茶の湯とは茶に湯をたて、飲むことを

しらぬといふて人のこわがる

其三

織田信長と稻葉一徹

茶會が一時戦國武士の密談場と化してより、種々の悲劇は此場裡に  
 演出せられました、有名なる稻葉一徹の奇禍を免がれたのと蒲生氏  
 郷の敢なき最後を遂げた椿事の如きは、其顯著き者とする事が出  
 來ます、一徹は稻葉伊豫守貞通といつた武將で、勇武絶倫、西美濃  
 の三人衆と稱へられた一人であります、元龜年間織田信長に屬して  
 より、武功拔群、一たびは淺井長政の軍を破り、二たびは朝倉義景  
 を殺しました、されば信長より其功を賞せられて、其名の一字を賜  
 ひ、長通と呼ばしめられたほどでありましたが、心甚だ之を悦ばず  
 天正三年七月剃髮して一鐵仙齋と號し、子右京亮をして舊名貞通を  
 襲せました、そこで信長は其二心あるを疑ひ、一日之を茶室に延き

名將茶談

相伴三人をして之を數寄屋に殺さしめんとしたのであります、所で坐上韓昌黎の一軸の掛て居るのを見「雲横秦嶺一家何在、雪擁藍關一馬不前」の講釋を爲し、昔し唐の韓退之が佛骨入内を諫めて帝の怒に觸れ、潮州へ左遷の不幸を招いたことを物語つた所、信長之を壁越に聞き、突然馳せ出で、汝には無骨一片の男と思の外、かく文事の嗜あるといふは感心である、實は今日の茶會に事寄せて汝を殺さん結構であつたと、三人の相伴役をして咎懷中より七首を取出さしめたのを見、一徹は平伏して誠に死罪を赦免下さることに忝く存候、然しながら私も實は内々今日殺さるべきを知り、是非一人を相手と思ふてかくは用意して参りましたと、此亦懷中よ

其四

蒲生氏郷

り七首を取出したには、信長愈々其武士らしき心掛を感じたといひます。此一徹は後秀吉に屬して軍功あり天正十二年秀吉の師家康と長湫に戦ひ、敗績した時、秀吉憤怒して師を進めんとしたのを極諫して思ひ止まらしめ、秀吉關白たるに及んで、直に三位法印に叙せられたのであります、中々に明智の士と稱すべきであります。

稲葉一徹が主信長と岐阜にて軍議を凝した際、年十三にして座に侍して眠らず、終夜之に耳を傾け、一徹をして、此奇童將來百萬の師たらんと稱讚せしめたのは、即ち蒲生氏郷でありました、さればこ

名將茶談

名將茶談

二百七十八

越前の役には力戦して、殊功を立て、天正十年夏信長の本能寺に  
 弑せらるゝや、夫人生駒氏を日野城に迎へ、信雄に従ふて京師に入  
 り、秀吉より其功の賞せられて、江洲の田五千石を封せられ、飛彈  
 守と稱し、幾くもなく南勢十二萬石に移封せられ、戦功を以て、累  
 進して正四位下左近衛權少將に任じ、佐々成政の驍勇に因める三階  
 笠の騎標を許され、十六年征奥先隊として、會津四十二萬石に封せ  
 られ、東北の豪傑伊達正宗をも屈服せしめ、後終に奥羽百萬石を領  
 し、從三位參議に任じ、文祿役には那古耶に従ひ、四年若松城を修  
 築しましたが、二月七日瀉血して大阪城中に薨じました、之は抑々  
 茶會の爲に誤まられたのであります。

氏郷は茶湯に於ては利休門下の七哲に加へられた一人でありました  
 が、豫て異志を懐ける石田三成は、上杉家の直江兼續と密會し、太  
 閤隔世の後は天下を取らねばならぬ、それには徳川父子を亡ぼすべ  
 く、之に親める氏郷を先づ害せねばならぬ、幸ひ氏郷は茶を好めば  
 太閤に讒言して茶を勧め、之に毒を盛るに如くはない、事成就せば  
 上杉氏を會津に封ずるとの約束にて、終に三成は氏郷の志あるこ  
 とを秀吉に告げ、秀吉をして氏郷を瀬田掃部の茶會に招き、之を毒  
 害せしめたのであります、瀬田掃部は矢張り利休門下七哲の一人  
 之が茶會であれば氏郷も行かねばならず、且は太閤の命といふので  
 參會しましたが、終に奇禍を買ふに至つたのであります、されば氏

名將茶談

郷は茶會にて吐血後家に歸り、病革るに及び、從容として辭世一首を咏んで世を去りました、年漸く四十にして此英名あつたのは、非凡の豪傑に相違なく、誠に惜むべきことであります秀吉もさすがに其辭世を見て、他意なきを了し、深く歎惜したといひます、其時の辭世は世に有名なる「限りあれば吹かねど花は散るものを、心短き春の山風」であります、何と悲惨の最後ではありませぬか。

口や手の茶をする人は多かりき

こゝろ茶の湯をする人ぞなき

其五

黒田如水

此人の軍功智略は固より叙するに當らない、抑々黒田官兵衛孝高として信長に仕へ、姫路城にて秀吉と兄弟の約を結び、爾來轉戰殊功を立て、其子長政をして後圖を成さしめ、自分は秀吉に大志を見援かれて、故らに剃髪し、如水軒と名乗つたほどの大豪傑、其見識亦拔群であつたゆゑに、茶事にも堪能で、一日家士を諭すために左の訓誡を與へました。

定書

一茶を挽候事はいかにも、しづかに廻し、油断なく滞らぬやうに引可申事に

一茶碗已下垢付不申様、度々あらひ可申事に

名將茶談

一茶の湯一ひしやく汲取候はゞ、又一ひしやくさして湯返をして  
 置可申候、遣ずて、飲捨に仕間敷事  
 右我流にてはなく候、利休流にて候間、能々守り可申事、すべ  
 て人々分別もしづかと思へば油断になり、とゞこほらぬと思へば  
 せはく敷成候事、各生附得方により候、また義理明白なるや  
 うにとおもへども、欲垢にけがれ易く、又主親の恩をはじめ、朋  
 輩家人どもの恩にも預ること多く候所に、其恩をおもふ心なく、  
 終に神佛の罰を蒙り候、しかれば右三ヶ條、朝夕の湯水の上にて  
 も能々分別候ため書附置候也

慶長四年正月

如水

實に乾坤を吞吐するの大度量、かくてこそ將に將たる伎倆ありと謂  
 つべしであります。

父母が挽木の如くゆがみなば

茶臼となりて子よ廻れかし (古今夷曲集)

其六

福島正則

此人の武功も世人の悉知れる所管々しく書立てるにも及びませぬ、  
 抑々天正初年尾張の市松として羽柴秀吉に姫路に仕へてよりの戦功  
 は、唯々其倜儻大志にして豪勇絶倫であつた點に歸することが出来  
 ます。されば元和三年には參議に任じ、從三位に叙されたが、不幸

にも晩年短慮の爲に一身を誤まり川中島に謫所せられて死するに至りました、惜みても尙餘りあることであります。さて此人にも一の茶事の傳ふべき事蹟があります、元來正則は常に物事あらくしく人を斬殺すを好むといふ殺伐の氣風を帯びて居りましたが、一日廣島城中に於て近習の士の少しの過誤ありしを縛り、之を櫓に押こめ餓死せしめやうとした、所が其士の恩を受けたる茶道坊主、此無殘の事を見るに忍びず、潜かに夜間焼飯を携へて之に與へんとしました、其時彼の士いへらく、われは罪あるゆゑにかくの仕合せ、其れに引かへ、御身は何の罪なきに、若し此事出の耳に入りなば、それこそ重罪に行はれん、努々構ひ給ふなと斥くるを、茶坊押し止め、否

否此事發覺して、同じ死罪に行はるゝとも厭ひはせじ、曩の日御身の計らひあればこそ、かく今までは存命せるもの、一旦恩を受けて之を報せぬことがありませうぞ、吾が志を空しくしたまふこそ口惜けれといふに、其士も涙を流し、さほどに仰する事なればとて、終に茶坊より夜々焼飯を受けてはかなき露命を維いで居りました、所が正則は彼の士共、今頃は餓死しつらんとて、櫓に上り見るに、毫も顔見衰へず、死すべき筈のもの、死せねば、コリヤ必ず飯を送れる者あるに相違ない、誰かある吟味せよと憤怒せる言葉の下に茶坊來りて、それこそ某の仕業にて候と白状す、おのれ何故かくは計へる、頭二つに切わりやらんと膝立直せる時、茶坊悪るびれもせ

す、我昔し罪を獲て既に水せめに殺さるべかりしを、彼人の申ひら  
 きありたればこそ今日までも存命しました、其恩を報ひん爲に、毎  
 夜忍びて飯を運びました、存分になし玉はれと、身を差出しました  
 所、がさすがの正則も聽いて落涙し、汝が所存感するに餘りあり、  
 實に人はかくこそあるべけれヤー、彼の士をも救せよとて俄に櫓  
 より出させて、其罪を宥免し、茶道坊主は感心の男よとて、深く賞  
 したのであります、情けに向ふ及なしとは、實とやかゝる事實を  
 いふのでありませう。

聖賢の道にもかなふ茶の湯なれ

道具料理の雑談はせぞ

其七

水野勝成

徳川武將中、水野勝成ほど人を斬つて其毎に亡命した男はありませぬ、天正七年十六歳にして戦功を立て、同十年家康に従ふて北條氏直と戦ひ、同十二年、長湫の役に従ひ、又盤江城を攻めて毎戦殊功を奏しましたが、一日家吏を斬り父の怒を恐れて亡命し、六左衛門と變名しました、後十五年豊臣秀吉九州征伐すと聞き、肥後にて佐々成政に屬して功を立て、十六年には宇土にて小西行長に仕へ、一千石を食みました、明年九月志岐天草の賊を平げ、此時又も人を殺して亡命し、更に加藤清正に仕へて一千石を食み、幾くもなく又

名將茶談

人を殺して去り、今度は黒田長政に仕へて千石を食み、偶々長政に從ひて東上する船中にて、主長政より細索の桅に結べるを解かしめられて、大に怒りかゝる、亡道の主を欲せずとて船の海濱に着した時亡命し、備中に往きて乗之助と變名し、三村紀伊守成親とて三千石を領せる武士へ仕へて、僅に十八石を食み、又もや人を殺して去り、慶長三年太閤薨じ、石田三成等黨を謀るや京師に出で、動靜を探り、翌年再び家康に伏見に謁して、月俸一口を受け、庚子の秋の東征軍に從ひ、父忠重の害に逢ふや、始めて水野家を相續し直に従軍西上して大垣城を抜き、十五年功を以て從五位下に叙し、日向守と稱し、十九年二十年の大阪兩度の軍に從ひ、元和三年大和郡

名將茶談

山を賜ひ、六萬石を食み、五年備後常興寺山に封せられて十萬石を領し、西海鎮護として福山城を築き、寛永元年從四位に叙せられ同十五年松平信綱に從ひ、島原の賊を討ちて之を平げ、十五年致仕し、正保三年剃髮して宗休と號し、慶安四年を以て卒しましたが、其一生士を待つこと厚く、貴賤の別を置かず、家臣を子の如く視ました故に、大に部下の歡心を得たといひますが、之は抑々道樂を盡した經驗に由るに相違ありませぬ。

此勝成に就ての茶事は、甚だ面白い事實があります、其亡命して三村紀伊守の家士となり、乗之助と名乗つて、十八石を受けた時、主人の子息美作守出生の翌春、祝賀のためとて椀飯の式を行ひ饗膳



終つて後、茶を客に賜ふこととなりました、其時勝成の乗之助は、さすがに昔の僂ばれ、茶たつる童坊を近寄せ手を束ねて一椀の茶を所望しました、所が此童坊甚だ小ましやくれた性として、之は上さまに給はるにて、おこと如き小身者に參らするものでない、控へめされといひました、乗之助急ぎて、さればこそかく所望するのであれば、是非一椀を恵めよと迫る、童坊益々意固地になり、いつかな聞入れぬ、乗之助乃ち怒り色に發し、侍ほどの者に、飲食物にて耻を見せぬものぞといふ童坊からくと笑つて、おことも侍の數と思ふて御座るか、笑止やくとて奥へ去つて仕舞ひました之を見たる乗之助大に怒り、大の眼に解立て、ハタと眺んだが、例の鬼勝成の氣

象、何條躊躇すべき、今は茶事畢れりとして、彼の童坊の歸り來るを待受け、唯一刀に切てすて、さらば此處に用なしとて、都を指して上つたのでありました、先の茶坊は情を以て正則を泣かしめ、此はまた無情を以て首を失つたのであります、戒むべきは尋常の素行で茶は元來此修養をするものぞと知らぬ世人多きはうたてきことであります。

直なるをまげて事足る茶杓ぞと

こと足る上も常にわするな

其八

堀直寄

名將茶談

堀直寄は監物直政の二子で、三十郎と稱し、陪臣であれども其才氣を愛せられて、太閤の小性と召出され、左右を離れず之に仕へましが、後終に徳川家康に仕へて、屢々戦功を奏し、丹後守の勇名を馳せ、初め飯山城三萬石に封せられ、間もなく一萬石を二度加賜せられ、元和二年三萬石を加賜せられて、越後長岡城に居し、四年四月又もや二萬石を加賜せられて、十萬石を領し、越後本庄城に移封せられて、家を傳ふるに至りました、かゝる勇士であつた故、茶事に關し、其小性時代に面白き逸事を存して居ります、

一日太閤茶室に入り、火をともし、炭を入れんとしける時、豫て事を以て死を賜ふた千利伏の亡靈現はれ出で、黒き頭巾をかぶつて爐

邊に危坐して居つたが、見る／＼内に眼中光を生じ、息に火を吐く悽まじの勢に侍女共恐れおの／＼けるを太閤さすがに驚かず、炭を入れ終りて後無禮ぞと一喝すれば利休の形退き坐しました、そこで太閤常の如くに居間を立出で、當時十五歳の直寄を喚び、丹後よ化物今數寄屋に居れば汝叱り來よと命じました、時に直寄惡怯れず畏り候とて廻廊を傳ひ行くに、一々窓下を閉せて妖怪の出づる口なきやうにし、やがて數寄屋た入れども、既に何物も居ない、即ち空しく引返してかくと太閤に告げました所、太閤は其勇氣に感じ、即座に羽織を與へたといひます、嘘の如き話ながら、さすがに活潑の少年ならでは到底學び能ざる所であります。

貴きも賤しきも知る道なれば

きたなきことを佗とおもふな

其九

板倉重宗

此人も名高き京都所司代、父勝重の後を承けて治績父にも優れ、周防の名智といへば一時著名のものでありました、されば元和九年從五位下に叙し、侍從に任せられ、正保二年には右近衛權少將、從五位上に進み、後水尾上皇よりは菊の記號を賜ひ、明曆二年退老後關宿城を賜ふて世を終るに至つたのであります、嘗て京師所司代たるの時、毎日決斷所に出づる毎に西面の廊下にて遙かに拜禮し、而し

て後決斷所に入り、茶磨一つを据置き明障子引立て其内に坐して茶を挽きながら訴訟を聞分けました、人々之を不審に思ひながらも年を過し、或時其仔細を問ふた所、拜禮するは愛宕の神、此神は靈現特にあたらと聞けば、重宗の決斷私心を交へず若し過あらば命を召し候へとて誓を立てたもの、茶を挽くに至つては靜心の法としたもので、心定まりて靜かなる時は手もそれに應じて磨の環ること平に、さしり落つる茶は如何にも細かである、かく茶のこまかに落る時我心も動かぬと知りて其後やうやく訴を判つたのである、特に明障子を隔てたは人の面貌によりて愛憎を異にし、爲に決斷を過誤あらんを虞るゝ爲であるとの所縁を一々に聽きて、人々感に堪へたと

名將茶談

二百九十五

いひます、重宗の如きは茶事を其職に善用ひたもので、かくてこの茶の修行も其價値ありと云べきであります。

身をおさめ家整ふるみなもとを

くみて知るべきひしやく一もと

其 一〇

酒井忠勝と高力喜兵衛

此人は武將といふほどでないが、酒井宮内少輔忠勝の家臣で祿四千石を受け、極めて清廉にして慈悲深き偉人でありました、然るに主忠勝收斂を好みて士民を惠まず、其弟長門守亦其欲を助けて政令愈々邪曲なる所より、租税重くして民疲れ、家士亦種々の課役に困

窮しました、之を見兼ねて屢々諫め、さまざまに手を盡せども忠勝の收斂改らず、終には一年江戸にて黄金千枚の茶入を買取りて愛翫し、在所に歸りて壺の口切る時分、茶の湯をして茶入開きに高力に見物せしめんとの噂さへあるに至りました、そこで高力は忠勝の前に出で、御茶開きには何卒臣を除かせたまへ、拜見の節多分落涙しませう故にと申し上げた、之を聽きたる忠勝不興氣に、そは亦何故ぞと問ふたのを高力膝を直し、黄金千枚の器は四五十萬石の大名も輒く買取らせらるゝこと難しと聞くに、今此事あるは主君が士民を毫も御憫みなく、且つ嗜欲にのみ耽りて仁義を顧みられぬ故で御座らう、士民の涙が斯る無益の弄物となるかと思へば落涙せずには居

られませぬ、況して其茶開きを拜見せんこと忌々しく候、一の茶入の爲に千萬人の心を失ひ玉は、十五萬石の富貴も獨夫に等しく、公方に對しては大不忠、御父家次公に對しては大不孝で御座る、御子孫長久の爲を思召し平に前非を御改めあれ、然らば徳川の御代誰か酒井の御家を輕んじませうぞと直諫しました、之を聽きたる忠勝大に怒り、彌々高力を疎んじ、後には殺害せんと企てました故に、松平信綱は戸田氏鐵と相談して、高力を引取り、更に平戸の領主松浦肥前守に預けて其害を逃れしめたと傳へます、酒井氏の如く自己の職分を忘れてかく嗜欲に耽るならば茶道といへども大に弊害を生ずるのであります。

其二

上田主水と多賀左近

少しく茶道の本意を了つた者は決して自己の職分を忘るゝものでなく、反て之を善用するのであります、既に上田主水といへるは茶の會を催ほすに客來て潜りを明けるを見、それを相圖に大筒の鐵砲を玉なしに打ならし、かくて後客を接待したといひます、又多賀左近は雲州御在番に茶の湯するとして、床に花はなく、兜を置いたといひます、其心掛何れも殊勝といふべきであります、所が此左近に就て一の失敗談がある、或日大猷院家光、佐久間將監に向ひ、今の時何人か茶をすけるとあつた時、さん候、人多き中に多賀左近は少しは心

掛あらんと存ずる由申上げたれば、即ち左近を召出され、花をのぞ  
 まれた、其時左近畏れ憚りて辭退すれども重ねて仰下されたゆゑ、  
 辭するに途なく、恐るゝ御前に出で、御座敷の床を見れば、花生  
 並に色々の花及び花切小刀の取副へあるにさらばとて立寄つて先づ  
 花一枝取て之を花生に入れ、又一枝取て小刀にて切れども切れども  
 切れない、不思議とあはつるさまを、大猷院御覽じ、將監の膝をつ  
 きて打笑はれ、左近の赤面せるさまを見よと仰られた時、ハツト思  
 ひて左近小刀を眺むれば切れぬも道理、むねにて切つて居つたので  
 ありました、驚きて取直し、花を切りて漸くに事終り、退出したの  
 を殊の外、家光笑止がられたと傳へます、之は畢竟氣の憶したるに  
 ぬか。

因るとはいへ、大猷院當時の威勢も實に想ひやらるゝではありませ  
 ぬか。

茶の湯とは己が心のすがたぞや

老と若きの程をかゝなへ

文修 名將百話終

明治四十四年十月五日印刷  
明治四十四年十月十日發行

名將百話  
定價金廿五錢

著者 足立 栗園

發行者 石田 忠兵衛  
大阪市東區安土町四丁目三八

印刷者 吉村 源次郎  
大阪市南區鹽町通二丁目四一

印刷所 積善館印刷部  
大阪市西區立賣堀南通二丁目

不許複製

大坂市東區安土町四丁目

發行所 積善館本店

電話特東一〇三番・振替大坂二九八番

修 養 文 庫

第 一 編	第 二 編	第 三 編	第 四 編	第 五 編
立 志 百 話	孝 行 百 話	偉 人 百 話	名 將 百 話	尊 王 百 話

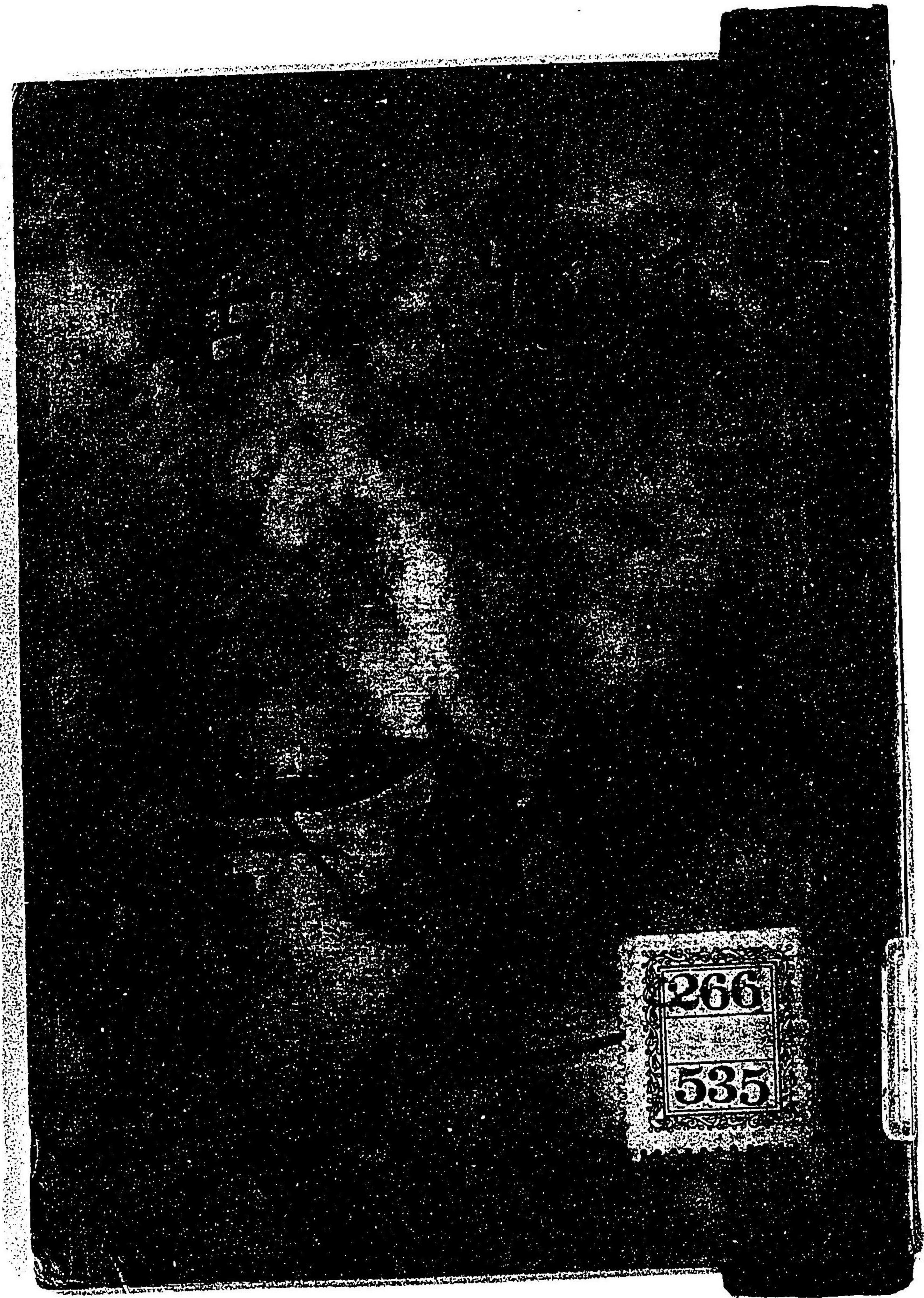
菊半形三百餘頁插畫數十個寫真版入頗美本

—(定價各廿五錢郵稅各四錢)—



266  
535





005114-000-2

特61-317

名将百話

足立 栗園/著

M44

ACE-1943



